此等四代の可汗の時代には回鶻は唐に對しては依然として馬市の繼續によりて利を貪り、唐も亦其の求に應じて價を給し、かくて兩者の間は表面上和平の關係を保ちたるものなりとす、此の間に於て回鶻の唐に朝貢し、若しくは互市を營みし記事は、兩唐書には貞元六年、同八年（以上兩項舊唐書廻紇傳）、同十二年、元和元年〔二二四〕（舊唐書本紀、新唐書回鶻傳、冊府元龜朝貢篇）、同二年（舊唐書本紀）等に見え、冊府元龜卷九九九互市篇及び同書卷九七二朝貢篇には、此等の外にも貞元七年に二回、同九年、同十一年の入貢を記せり〔二二五〕、而して此の中貞元六年の入貢に就きては、舊唐書にも冊府元龜にも

貞元六年六月廻紇使移職伽達干歸蕃、賜馬價絹三十萬疋

と見え、貞元八年の記事には、舊唐廻紇傳に藥羅葛靈の入朝を記したる續きに

仍給市馬絹七萬疋

と見え、冊府元龜互市篇には

八年七月給廻紇市馬絹七萬疋

と見ゆ、代宗の大曆八年回鶻の横暴を極めし頃に、馬一疋を以て絹四十疋に易へたりしことは前に見たるが如くなれば、絹三十萬疋、若しくは七萬疋等の馬價は、かの「毎使來不過二百人、印馬不過千疋」の約が、當時既に行はれず、回鶻は尚以前の如く、頻年唐に多數の馬匹を輸して利を貪り、唐は之を拒む能はざりしものなるべきを推知せしむるものなりとす。

此の如く此の時代に於ては、回鶻は唐に對しては稍〻靜穩の情態を持したりしが、一方其の西邊に於ては劇しく吐蕃・葛邏祿等と相爭へり、新唐書回鶻傳に、貞元二年〔二二六〕（建中二年の誤）北庭節度使郭昕の使が、回鶻を經て長安